

三商レポート

第九十三話 「杖」

相続プラザ（株）三商 内藤 雄

〒187-0003 小平市花小金井南町1-14-24 電話 042-467-2103

E-mail sansyo@trust.ocn.ne.jp URL <http://www.souzokusoudan.net>

はじめて杖を頼って歩く生活を体験している。

椎間板ヘルニアの痛みを長期間ガマンしているうちに左脚にシビレがきて、突然歩けなくなってしまった。

幸運にも名医による緊急手術をうけることができた。痛みは消えたが、シビレは残った。筋力が衰えていたため、回復には長期間のリハビリが必要となった。

足腰の筋力アップのため、歩行訓練が重要なリハビリメニューの1つである。

歩行器にしがみつきながら歩くことから始まり、杖を使っての歩行に変わった。

気を抜くと、膝が抜けてその場に崩れてしまう。杖を持った右手に力が入る。

1本の杖を頼りにゆっくりと歩き出し、少しずつ歩く距離が伸びるようになった。

平で手すりもあるリハビリ室や病棟の廊下と違い、外に出ると段差や傾斜がある。人や車の動きや横断歩道の信号もある。支えのない町の中を1人で歩くことの不安を知った。

こうした個人的な体験を通し、「杖」にまつわるあれこれを連想してみた。

すぐにお年寄りをイメージした。面倒を見てくれたおじいちゃんは、いつも杖を持って縁側に腰掛けていた。5歳の頃の、かすかな記憶である。

小学生の頃、遠足で高尾山に登った。みやげ物店に並ぶ「高尾山」と書かれた杖が欲しかった。それを買う友達をうらやましく思った。

中学生の頃、兄に連れられ富士山に登った。背丈よりも長い金剛杖を手にして嬉しかった。山頂で杖に記念の焼印を入れてもらい、思い出の品になった。

学生の頃、下部温泉に泊まった。近くの神社に松葉杖が山積みされていて驚いた。湯治により癒えた人々が杖を奉納する習俗があることを知った。

町の中で白い杖を胸の前に持ってたたずんでいる人がいたら、方向が分からな

くなり困っている合図をしているのだと知った。

東日本大震災から1年になる。いまだ復旧・復興にはほど遠い。しかし、日本中の人々が「心の杖」となって被災された人たちを支えている。

こんなことを思ううちに、「そうか！相続アドバイザーには杖の役割があるのだ」と気づいた。

相続で困り、悩み、不安な気持ちでいる人は多い。

「何から始めたらいいの」

「誰に相談したらいいの」

「法律や税金はどうなっているの」

「こうしたらどうなるの」

「どうしたら円満にまとまるの」など。

1人で考え決めることが不安な時、支えになってくれる人が傍にいてくれたらとても助かる。そして、自分で決断し、安心して踏み出せる。やがて解決すれば、アドバイザーは必要なくなる。それでいい。

杖のように、本当に必要な時に頼りにされる脇役でありたい。

(2012年3月5日)

～いつも「三商レポート」をお読みいただきありがとうございます。～